

人口が少ない自治体における助け合いによる生活支援に関する課題と対応策は何か

提 言

「共有」から「共感」を生み、「共生」へと向かう。明るく楽しい未来を描きつつ、「地域」という運命共同体チームでスクラムを組もう。ヒト・モノ・カネ・情報を持ち寄れる場（プラットフォーム）を中心に、未来づくりが進んでいく。

登壇者

【進行役】	石井 義恭氏	白杵市高齢者支援課
	白石 祐治氏	江府町長
	生田 志保氏	江府町福祉保健課長
	津澤 安彦氏	浦河町第1層S C
	平田 達哉氏	関川村第1層S C
	関崎 豊氏	麻績村住民課

■ 寄せられた声から

- 小さな自治体だからこそ事業・取り組み・場・人などの柔軟な掛け合わせが可能になる。住民との共感を大切にできたということが登壇者の皆さんの実践から学ぶことができました。
- 江府町役場内の全ての職員にクレドを実施しており、活動の方向性を定めている取り組みに感銘を受けた。

議事要旨 石井 義恭氏

小規模自治体のメリットは多く、豊かな環境（自然、水、空気）、ゆるやかな時間、失われていないつながり等が色濃く残っている。一方で、その豊かさが当たり前であり、わがまちの素晴らしさとして意識されにくく、足りないものばかりが目についてしまう実情がある。人口減少等の厳しい環境的な変化が続く中でも、未来に夢が描けるようなまちづくりを進めていきたい。

小規模自治体ならではの体制構築（環境づくり）のメリットとして、より小さな単位での圏域設定が可能なことや、状況変化に応じて体制等の仕組みを変更しやすいことがあり、これまで以上にフレキシブルな発想や展開に努めていくことがメリットを活かすことになるだろう。デメリットとしては、住民からの行政への期待が強いことや、小規模でも行政の縦割りが存在すること、一人の職員が複数の役割を兼務することで自治体の責務をどうにかこなしているといった厳しい状況等があり、多くの小規模自治体に共通する悩みだろう。手段であるはずの事業の実施に追われてしまわないよう、本来の目的である「住民の暮らしを支える」ことを中心に据え、手段を目的化させない意識を強めながら、制度自体の弾力化についても声をあげていくべきだろう。

また、行政だけでは解決できない課題が多く、住民を含む地域との協働は必須といえる。コロナ禍も含め、地

域を取り巻く環境が大きく変わる中、住民・専門職・行政職といった立場や経験等を超えて、同じ方向を見据え、一つのチームとして機能するためには、「何を実現させたいか」という理念（目指す将来像）に加えて、「どのように考えて、動くべきか」を共有するためのクレド（志、行動基準）を一緒に考えていくことも有効ではないだろうか。ワークショップ等の手法を活用し、地域とともに作り上げるプロセスを重視しながら進めたい。

なお、これまでに関わりが少なかった分野にもつながりの輪を広げ、「福祉的な活動×楽しい活動」といったような異なる要素の掛け合わせによって、関係者の増加を図りたい。関係者が増えることにより、さらなるネットワークの広がりが期待でき、新たな気づきや自由度の高いアイデアも生まれやすくなる。こうしたネットワークこそが「地域の力」であり、新たな取組に着手せずとも、既存の協議体等に僧侶や神職といった地域の暮らしに密着した関係者を加えるといった、新たな発想での体制の見直し等も有効である。

つながることで共有を繰り返し、共感に基づいた行動や一体感が生まれ、時にクスッと微笑み合い、ワクワクやドキドキできる楽しみがある地域になっていくことが、わがまちの未来を支えていく。

アンケートの結果 参加者概数：332名（オンライン：330名、会場：2名） 回答者数：80名

